

【一橋大学審査博士学位論文】

現代日本語における否定と呼応する副詞の類義表現に関する研究

—コーパスに基づく副詞の意味記述の試み—



一橋大学大学院 言語社会研究科

劉時珍

LD082004

2019 年 7 月 30 日

[要約文]

1. 本研究における問題意識と研究成果

1-1 本研究の問題意識

本研究の前身である修士論文では、日本語教科書の中の副詞全般についてどのような問題があるのかに焦点を当てて論じた。方法としては中国で出版され今でもよく使われている教科書『新編日語』で扱われている副詞 69 個全てを対象にして調査した。質問紙調査法を用いて、『新編日語』全 4 冊に出てくる副詞 (69 個) の例文 282 例について、22 名の日本語母語話者にネイティブチェックを依頼し、①5 つの類義語の中から教科書の副詞が選択されるか否かを問う「適切な副詞の選択」、②教科書の副詞が選ばれなかった場合、なぜ選ばれなかったのか、その理由を「原因表」に基づき選んでもらう「原因探求」の 2 段階に分け、調査を行った。そして、調査結果をもとに、不自然さの原因を分類し、考察を行った。その結果、『新編日語』では、副詞の提示の際に、意味的整合性、文法的な共起関係、文体的整合性の面で、例文そのものと副詞との間に齟齬が見られ、それが不自然さの原因になっていることが明らかになった。また、中国語にも同形の漢語副詞があることによる意味上、文体上の中国語からの転移・干渉が見られた。

しかし、一つ大きな課題が残った。それは類義表現として扱った否定と呼応する副詞の一部は複数選択だったため、なぜ一つの文で同じ意味で複数の副詞が使えたのか、その違いは何なのかということの原因解明に至らなかったのである。結果について調査協力者何名かにインタビューを行い、なぜ複数選択したのかと質問したが、単文だけだと、どれも使えないこともない、むしろいずれも最も適切な選択とも言えるほど、はっきり違いがないということだった。調査協力者は母語話者として無意識に使いこなしているはずだが、かなり類義性が高い表現になると、その違いはただ内省に頼るだけでは使い分けの分析は難しいこともあると言える。その傾向は全体の副詞の中で、否定と呼応する副詞の類義表現に顕著であった。日本語にはこれらの否定と呼応する副詞が類義表現としていくつか存在しているが、中国語にはそれぞれに対応する否定の副詞表現はなく、これらの形式は全て同一の形式に訳される。そこが中国人日本語学習者にとって習得しにくいところである。

それでは、類義的な関係にある、否定と呼応する副詞はそれぞれどのような意味用法を持っており、お互いの間にはどのような異同点があるのだろうか。また、日本語母語話者の内省に頼るのではなく、言葉で言葉を説明するという部分をできるだけ簡潔にし、他の何らかの適切な方法で、副詞の意味用法を明らかにする方法はないのか。そこで、本博士論文では、この否定と呼応する副詞を対象に、コーパス (大量のデータ) に基づく言語事実から分析を

行うことにした。

具体的な選定作業では 3 つの理由から考察対象の副詞を選んだ。①修士論文で残された課題としての否定と呼応し、日本語教科書でよく説明される副詞を対象に、②入れ替えという文法的な方法が適用しにくい、類義の度合いが高い副詞を考察対象にした。そして、③類義表現を比較することによる意味・用法の違いを明確にするため、2 つずつ比べることによる比較のパターン数の限度を考え、1 つの類義カテゴリーに副詞を 4 つ配している。その上で、意味上から、「完全否定」「部分否定」「困難否定」という 3 つカテゴリーを設けたため、本研究で扱う副詞の数は 12 個になった。定義上の解釈を省くため、「完全否定」の中の 4 つの副詞、「ぜんぜん」「まったく」「すこしも」「ちっとも」を取り上げ、一番よく親しまれている「ぜんぜん」をタイトルにし、「「ぜんぜん」類」と名づける。同じ考えで、「部分否定」の中の 4 つの副詞、「あまり」「そんなに」「それほど」「たいして」の中から用例数が最も多い「あまり」をタイトルにし、「「あまり」類」と名付ける。同様に、「困難否定」を表す「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」を含むグループを「「なかなか」類」と名付けた。

1-2 本研究の目的および位置づけ

本研究は否定と呼応する 12 個の類義表現の副詞（「ぜんぜん」類（「ぜんぜん」「まったく」「すこしも」「ちっとも」の 4 つ）、「あまり」類（「あまり」「そんなに」「それほど」「たいして」の 4 つ）、「なかなか」類（「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」の 4 つ））を対象に、コーパスを用い、副詞の意味用法を大量のデータを定量的に処理することによって、意味用法などの使い分けを明らかにすることを目的とする。そして、コーパスを用いた研究方法の妥当性かつ有効性がその 12 個の副詞によって証明されれば、他の類義副詞についても同じ方法を用い、意味用法の使い分けを見出すことができると考えられる。本研究はこの意味で方法論の検討を第二の目的とする。

本研究のこの第二の目的は、日本語学習者の副詞（の意味）の習得方法論の確立にある。本研究の方法を利用することによって、副詞の意味解釈がある程度できる。と同時に、使っている方法は、学習者がこの方法を使えば、自ら副詞の意味が分かるように、単に文を読み、勘を養うだけではなく、全体的に一つの副詞が理解できるように研究方法上の試行錯誤もした。その結果、本研究の集計方法を 2 種類にすることになった。副詞を調べる際、修飾の係り先の述語を調べるのがもっとも簡単な、わかりやすい道である。しかし、ここで、今までの係り先を語彙素レベルに戻って調べるという一般的な方法だけでいいのかという問題にぶつかった。本論文でも語彙素に戻して副詞の係り先の述語を調べた。ところが、特徴が

強い副詞、本研究で扱う3組の副詞の最後の「なかなか」類（困難の意を表す「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」）については、可能形との共起が80%以上で、どうしても可能形を無視して、語彙素で集計するのには違和感を覚える。そこで、学習者という対象を念頭に入れ、あえて、特徴がそこまで顕在的ではない「ぜんぜん」類と「あまり」類と違う集計の方法を試みた。「なかなか」類では係り先を集計する際、述語を語彙素に還元するのではなく、書字形で集計した。一見、一貫性のない方法を用いているように見えるが、方法論の確立の面でも、むしろ、本論文では進んで今までの方法を利用していながらも、対象者（学習者）の特別性を考え、別の方法も試みたのには、学習者でもある筆者の考えからである。学習者自らの習得能力を高めるプロセスを探るという面では、今までの主流としての非母語話者の日本語研究としての母語を対象にする対照研究、学習者の日本語の習得困難点の調査という非母語話者らしい研究と並んで、日本語の既成の言語資源（辞典・コーパス）を借りる本研究のスタイルもまさに、解決型の学習者②も可能な研究にもなっていると考えられるのである。それが本研究の出発点であり、本研究の位置づけでもある。

1-3. 本研究の成果

本研究の成果は、主に次の3点にまとめられる。

第一に挙げられるのは、上述したように、類義的な関係にある否定と呼応する副詞の実態がまだ明らかになっていないということである。その結果として、日本語学習者にわかりやすく説明できるように副詞を研究する余地がある。日本語母語話者であれば、はっきり説明できなくても、使い分けが自然にできるので、あまり問題が生じないのは確かである。しかし、日本語学習者が増えている現在、そのような問題の解決の必要性は増してきている。日本語学習者は特に上級レベルになると、日本語の表現を使いこなしたい、きちんと自分の気持ちを表したいと思うようになる。類義表現の使い分けを知りたいと思うのも当然のことであろう。それで、今までそれほど重視にされていない、非常に類義的な関係にある表現の異同点を明らかにすることが大きな意味を持つようになったと言える。こうした疑問に答えるには、今までの研究成果、コーパスの副詞の実態から副詞の内容をキーワード（簡潔な言葉）でまとめ、学習者に提示するのが一つの分かりやすい方法だと思われる。

本研究の第二の成果は、コーパスに基づく副詞全般の客観的分析方法の確立である。これらの非常に意味が近い副詞の表現を内省に頼って明らかにすることが難しいということは修士論文の調査結果によって示唆された。また、今まで主に行われた副詞の研究方法は同一の文で類義表現を入れ替えてみて、非文になるか、不自然になるかを内省で判断して、その原因を見出す方法がよく使われている。しかし、非常に意味が近い表現になる

と、同一の文でも不自然さを感じないことが多い。そうすると、どのような方法を取ればこの問題が解決できるのだろうか。

ここで、一つ有効な方法と考えられるのは大量の実例を集め、詳細に比較することである。日本語に関する分野でも大量の、かつ信頼性が高いデータの必要性が認識されている状況を受けて、国立国語研究所によって『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)が構築されている。これは大量の人的、物的リソースと時間を費やし、今までないに規模で構築された、最も信頼性が高い言語コーパスだと言える。その大量の言語データを用い、方法の妥当性を十分検討したうえで、数量化できるところを点数化にすることによって、内省も効かない非常に意味が近い、否定と呼応する副詞の意味用法の異同を明らかにすることができることが予想される。本研究は類義表現の意味用法などを明らかにするために、コーパスを用いその有効性と限界性を試し適切な研究方法を見つけるという点でも大きな意義を持っていると思われる。

三点目としては、本研究の延長線にあるように思われるが、副詞全般の整理のための一貫性のある方法を見つけるのに役立つことが期待される点である。既に鈴木一彦(1959)が副詞の分類が一貫性を持っていないと指摘しているように、日本語の品詞の中で、いずれの文法理論においても、その境界がはっきりせず、品詞が確定しづらいのは、副詞・連体詞・接続詞・感動詞の四つである。これらのうち、副詞と名づけられる品詞については、最も問題が多く、古来多くの議論がなされて来ている。副詞に焦点を合わせ、これを整理し分類しようという試みがこれまで数多くあった。その中に杉山正世(1956)の「副詞の境界線」、井上博嗣(1956)の「副詞と連体詞」、渡辺実(1957)の「品詞論の諸問題」等があげられる。しかし、これらの論は一貫した基準を持たずにいくつかの副詞群を処理していたり一定の基準があってもそれが一部のものについての境界線を示しているにすぎないと思われる。未だに副詞全般の整理はできていないといっても過言ではあるまい。本研究は副詞を全般的に扱い論じたものではないが、その中の代表性のある、類義性が高い副詞を選定し、それぞれの意味の違いから類似性の本質を探り、副詞に関する考え方、分類、整理を行う試みである。

2. 本研究の概要

本研究の構成は4部からなり、それぞれ以下の通りである。

2-1 第I部—本論の目的と意識所在・研究方法の明確化

第I部は第1章～第3章であり、そこでは、本論文の目的と意識所在・研究方法について

て論じた。

第1章は本論文の目的は大きく2つに分けて2点ある。1点目は3組12個の類義表現の副詞の違いを明らかにすることであり、もう1点は副詞の類義表現の考え方、二次元軸論という観点について述べた。合わせて、本研究の手法は学習者でも実行可能なものであるという方法論についても検討した。

第2章では先行研究のまとめである。本研究で扱う副詞の先行研究と否定と呼応する副詞に関する研究を概観した。

第3章では本研究の具体的な方法論の設定を述べた。

2-2 第Ⅱ部—3組の類義表現の副詞のコーパスの実態調査からの異同の探求

第Ⅱ部は第4章～第6章であり、そこでは、3組12個の類義表現の副詞に関するコーパスの実態調査の結果を述べた。第4章「ぜんぜん」類、第5章「あまり」類、第6章「なかなか」類からなり、コーパスの強みを利用し、実態調査を行うことにより、3組内の4つずつの副詞の違いを見出すことを目的とした。

具体的な段階としては、まず基本情報である各組の4つの副詞の肯否の割合の違いを見た。BCCWJの中の副詞を1000例無作為抽出し、それぞれの肯否の割合を算出した。次に、ジャンルの分布の違いを述べた。本研究の目的に基づき、6つのジャンルに分け、類義表現の各副詞のジャンルごとの出現状況を見た。三番目に、副詞は修飾語であることに基づき、無作為抽出した1000例を肯否に分けた後、副詞の係り先の述語を集計し、2つずつの類義表現の述語の違いを分類語彙表の分類を参考にし、論じた。最後に、この3つの面から各副詞の点の違いをデータによりまとめた。4つずつの副詞の否定の違いを論じた。

第4章では、「ぜんぜん」類の4つの副詞、「ぜんぜん」「まったく」「すこしも」「ちっとも」について、BCCWJから無作為抽出した1000例のデータを、3つの面、「肯否率」「ジャンルの分布」「係り先の述語の内訳」から分析した結果に基づき、その違いを探った。

第5章は、「あまり」類の4つの副詞、「あまり」「そんなに」「それほど」「たいして」のBCCWJにおける使用実態を調べた。第4章と同じように、3つの面、肯否の割合、出現ジャンル、係り先の述語から4つの副詞の相違点を調べる。述語の特徴を調べるとき、便宜上2つずつ比較し、その違いと特徴を述べた。

第6章では、「なかなか」類の4つの副詞、「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」を対象に、第4章、第5章と同様の方法を用いて、BCCWJの中の副詞の使用実態を3つの面、副詞の肯否の割合、出現ジャンル、係り先の述語から「なかなか」類の4つの副詞を調べた。

この3章の12個の副詞の実態調査の結果によると、第4章の「ぜんぜん」類は述語の重なり率からも、入れ替えの方法からも4つの副詞の類義度がこの3組の中で最も高いことが分かる。その次は、第5章の「あまり」類で、類義度が低くなり、正に本研究の前身でもある修士論文の課題としての同じ文の中の異なる副詞のニュアンスの違いが浮かんできた。第6章の「なかなか」類はその中の4つの副詞の述語から「困難」の役割分担をそれぞれしているように思われる。

2-3 第Ⅲ部—文法項目の得点化による副詞の類義表現の軸の探り方の検討

第Ⅲ部は第7章～第10章であり、第Ⅱ部より発展し質的な飛躍を図る部分と位置づけられる。第Ⅱ部では、3組12個の副詞について、「面から具体的な点」を探るという作業を行い、コーパスの有効性としての類義副詞の違いの傾向を見ることができたと考える。そこでは、第Ⅲ部では、一種「ミクロ」な観点を持ち、副詞の文に現れる個別の文法的な特徴を集計し、得点化にする作業を行う。第Ⅱ部の結果を受けて、データに基づく文法項目の得点化による副詞の類義表現の異なる「軸」の探り方を検討した。第Ⅲ部は、その上で、「点から線へ」という観点から、この12個の副詞を例に、「副詞の類義表現とは」「副詞の考え方」について論じる。

個々の文法項目を一まとめにして何を意味しているのか、全体として、副詞の類義表現について、どのような考えを軸にし、よりよく副詞の類義表現がわかるのかについて本論なりの観点、すなわち、文体上の「硬度」と「くだけた度」の交差、心情の「相手軸」と「自己軸」の交差、程度の「純粹程度性」と「評価程度性」の交差という二次元軸論を述べた。

まず、第7章では、副詞の文体について、「ぜんぜん」類の「ぜんぜん」、「まったく」、「すこしも」、「ちっとも」を対象に、副詞の文の文体的な特徴項目を集計し副詞の文体を測る試みを行い、その結果として、「ぜんぜん」類の4つの副詞の文体の差は、「硬度」と「くだけた度」の2つの軸の交差から説明できるという結論を導いた。

第8章では、副詞の心情とはどのような軸に沿って考えるべきかを、BCCWJのデータを用いて「ちっとも」と「ぜんぜん」の相違を実証的に明らかにした。「ぜんぜん」類の「ぜんぜん」と「ちっとも」を例に、「自己軸」と「相手軸」という新たな概念を立てて、「相手軸」と「自己軸」の二次元の交差として、その基本的な違いを論じた。副詞の心情は何を指しているのかということを課題とし、副詞の心情を測る試みを行った。

第9章では、副詞の程度性について、「あまり」類の副詞の程度性の中身を論じた。「あまり」類に属する「あまり」「そんなに」「それほど」「たいして」は程度副詞とされる。これ

まで、程度副詞の下位分類には純粹程度と量程度があるが、本章では、主に、「あまり」と「そんなに」を例に、程度副詞の中に、純粹の程度性と評価の程度性があることを論証した。

程度性の「中身」をデータで示し、「あまり」類の4つの副詞を例に、従来の観点到に賛同しつつも、程度性の中に「評価性」を取り入れた、「純粹程度性」と「評価程度性」の二次元軸を立てた方がよりよく程度副詞の意味を捉えられることを主張した。

BCCWJのデータに基づき、①否定の種類、②目的語の中の程度修飾成分、③係り先の形容詞の評価性の3点から副詞の程度の中に潜んでいる評価性を論じた。この2つの副詞の違いを論じることにより、程度副詞には、純粹に程度のみを表す副詞とニュアンスを帯びた副詞があることを述べる。「あまり」はこの2つの性質、程度と評価を合わせ持つ程度副詞であることを論証した。

第10章では、困難の意を表す副詞、「なかなか」類の4つの副詞「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」に関して、困難の意を測る際に、『分類語彙表』の役割を検証できたこと、及び、文法項目から出た違いから4つの副詞の困難の意の役割分担について述べた。を調査対象に、BCCWJを用い、定量的にその意味の違いを明らかにした。

『分類語彙表』を参考に、述語の特徴に注目すると、4つの副詞と共起する述語の一致率が高く、実現の困難という意味では類義表現といえる。一方、困難の意味の違いとしては、「なかなか」は「実現の困難」より今現在の「進行の困難」「存在の困難」の意味に重点があり、「とても」は普通、一般的という相場的比較尺度からした困難の度合いが高いことを表す。「とうてい」は話者の判断と現実との乖離が著しく、困難度が最も高く、反事実の困難の意も持つ。「どうしても」は「なかなか」の進行困難と反対に結果としての「できない」という意味を表すという結論が得られた。

2-4 第Ⅳ部—通過点という位置づけと全体像を描く試み

第Ⅳ部は第11章であり、本論文の第Ⅱ部と第Ⅲ部のまとめを行い、両者を結び付けた上の日本語教育への提言という位置づけである。

第11章では、本研究のまとめと今後の課題を述べた。本研究の目的として、本研究で扱った12個の副詞を第Ⅱ部と第Ⅲ部の結果に基づいて意味解釈をキーワードで表現し、学習者向けの説明方法を試みた。

本論文の成果として、否定と呼応する12個の副詞の意味の芯をそれぞれのキーワードでまとめ、学習者に教えるときのポイントも考察した。

本研究はまだ通過点という位置づけであり、今後の課題もこの第Ⅳ部で述べた。